甲状腺癌術後の経過観察中に判明した結核性リンパ節炎の一例

仲 島 孝 昌[1)]　小河原　剛[1)]
工 藤 睦 男[1)]　大 氣 誠 道[2)]　洲 崎 春 海[1)]
1）昭和大学耳鼻咽喉科学教室
2）大氣耳鼻咽喉科

【はじめに】結核性リンパ節炎は近年増加が指摘されており，日常的に遭遇しうる疾患の一つである．甲状腺癌術後に頸部リンパ節再発を疑い，頸部リンパ節摘出術後に結核性リンパ節炎と診断しえた症例を経験したので報告する．

【症　　例】56歳，女性．ベトナム出身で，32歳時より本邦在住．2006年8月に超音波検査にて甲状腺腫瘤を指摘され，当院にて甲状腺癌と診断し，同年11月に甲状腺全摘出術，両側頸部リンパ節郭清術を施行．病理診断は甲状腺乳頭癌（低分化癌）であり，同時に多数のリンパ節に結核結節を疑わせる肉芽腫を多数認めたが，PCR検査等では結核とは特定できなかった．以降，外来にて経過観察していたが，2008年9月のCT検査で，右頸部リンパ節腫大を認め，超音波下穿刺吸引細胞診を施行したが，ClassII．2009年1月に右頸部リンパ節の増大傾向を認め，右頸部リンパ節摘出術を施行．術中迅速組織診では中心部に壊死を伴う大小の類上皮肉芽腫を認め，PCR検査で結核菌陽性であった．喀痰，創部ドレーンは培養陰性で，CT検査では肺病変は認めなかった．

【治　　療】INH+RFP+EB+PZA　4剤併用の内服治療を開始し，現在も外来にて治療中．

【考　　察】当初は甲状腺癌術後再発と考えられたが，外科的リンパ節摘出後に結核性リンパ節炎と診断しえた．頭頸部リンパ節腫脹を考える上で，結核性リンパ節炎の可能性を考慮する必要性があると思われる．